宮尾登美子　「菊籬」 ―短編集― を読んで

斉藤　　‘15.9.26

京都で「民芸」のお芝居を観た帰り、三条駅の近くの book store で 2 冊ほど買った一冊。　本の安さにビックリ。図書館で汚い本を借りるよりよっぽどましだと思った。

8 つある短編集の中から
宮尾登美子は一途に生きる女性と女のさがをテーマにした物が多いと思う、

「彫物」　入れ墨に魅せられた 2 人の姉妹と刺青師にまつわる話。
姉の方はさんざん男を求めるが捨てられる。それではもう男を絶とうとあこがれていた刺青をする。それを見た妹が（七つ違いの異母姉妹）私もと同じ刺青師もとへ行くが・・。
刺青師はこの若い妹の肌に刺青したい気持ちを捨てて彼女を妻にしてしまう。
刺青師も大切な人は傷めず、白い肌のままがいいらしい。刺青師としては失格かもしれないが男とはこういう者だと思う。
筋書きはオーヘンリーのどんでん返しに似ていてちょっと面白かった。

「金魚」　これも女のさがをテーマにした物だが、いまいち感動はなかった。

「水の城」女三代にまつわる話で、三人三様の全く異なる生き方、生活基盤である。

「菊籬」　辞書によると籬とは花街の見せものにある店の竹格子とある。宮尾登美子の生家の話「櫂」にも書かれている話しで「菊」という女の生涯である。
でも、彼女は危ないところを登美子の父親に 10 円で買われて宮尾宅で娘として育てられて、家の手伝いをしながら他家に嫁ぎ、平凡な人生を送った人で何故子の題名が付いたかよく分からない。

「千代丸」これは三味線の名器の名前である。離婚した女性が生活苦から次々家の中の物を質屋に入れ、最後の大切にしていた三味線を質に入れるというストリーで登美子の人生にもダブルところがあると思う。

今回は感動的な本ではなかった。何かで読んだが、
「本は二種類ある。一つは人生に訴えるかける感動的な本。もう一つは時間つぶしの本」
残り少ない人生。限りある時間。時間つぶしの本は入らないと思うが、今回は感動的な本ではなかった。残念。

宮尾登美子の小説で一番良かったのは　「一弦の琴」が一番好き。でも、この人の小説は、男の人にはあまり読まれないのでは？？と思った。